



「桜蔭会百二十周年祝賀会」と

「源氏物語講演会」

支部長 渡辺 妃佐子

コロナ禍がようやく収束しはじめた矢先、能登半島地震、その支援に向かう海上保安庁の航空機事故と重苦しい令和六年の年明けとなりました。そんな中、桜蔭会は百二十周年を迎えました。五月二十五日に、五年ぶりの対面での総会と祝賀会に、代議員の入江様（昭四六国文）と茗荷谷の新しい国際交流留学生プラザに出かけて参りました。母校は微音堂の前の金木屋が緑を深くしながらも変わらぬ佇まいで静かに迎えてくれました。

総会では、佐々木泰子学長、高崎みどり会長のご挨拶があり、新たに新設された共創工学部が二・五倍の倍率で新入生を迎えることができたとの新井由紀夫副学長のご報告がありました。

平成十七年の栃木支部が支部長不在という困難な時に開催した総会に、桜蔭会本部から当時の齋藤興

NO. 29  
2025. 3. 1

志子会長と三浦良子副会長が宇都宮まで応援に来てくださいました。会員一同とても有難く心強かったことが、今でも思い出されます。この百二十周年祝賀会で、なんと十九年ぶりに齋藤興志子元会長にお会いすることができ、手を取り合って再会を喜びました。桜蔭会栃木支部は今年七十四年目を迎えました。こうした時間を重ねて歴史を繋いでいっているのだと実感しました。

その時、当番幹事を担当下さっていた渡邊裕美子立正大学文学部教授（昭五九国文）に今年の講演会の講師をお願いしました。十月十三日（日）栃木県総合文化センターで『源氏物語』の遺響と和歌をめぐって」という講演会と総会を開催いたしました。

今年の講演会も一般社団法人桜蔭会支部公益事業として承認され、下野新聞に募集記事を掲載していただくなどの広報活動をした結果、定員を超える参加申し込みがありました。おかげさまで当日は会員22名、一般37名で、59名の皆さまにお集まりいただきました。

NHK大河ドラマ「光る君へ」では源氏物語の世界がみやびで華やかに展開していて、世の中の関心を集めるなか、最新の研究結果もご紹介下さりつつ格調高いご講演をいただきました。源氏物語がいかに後代の文学に影響があったかを丁寧に読み解き解説くださり、一千年の時を越えて、源氏物語という文化遺産を我々が持つことのできる幸運を共有しました。「源氏物語が人の人生に寄り添う物語」であり、「人生が深まれば、源氏物語の読みも深まる」という言葉に励まされました。心に余韻がいつまでも残る講演会となりました。

なお、下野新聞社から、講演会の取材を受けておりましたが、十一月一日の下野新聞「雷鳴抄」というコラム欄で当会の源氏物語講演会が取り上げられました。この日は、『紫式部日記』で藤原公任が「あなかしこ、このわたり若紫やさぶらふ」と語りかけ、初めて源氏物語の記述があった日で、その一〇〇八年十一月一日にちなんで二〇二二年に制定された「古典の日」という記念すべき日だったそうです。

桜蔭会栃木支部  
渡辺妃佐子・発行



渡邊裕美子教授が源氏物語を「出版文化が広まった江戸期に一気に多くの読者を得た。日本の貴重な文化遺産」と語られたと紹介され、「ドラマも興味深いが千年読み継がれる名著に親しめたら面白い」とコラムは結ばれていました。

今回は初めてご参加いただいた三村様（平一音）、榎津様（平二食）、村山様（平五家経）が当番幹事を担って下さいました。事務局長として、事務局を統括して下さいました大森様（平六食）、下野新聞などの広報活動や会計を担当下さった品川様（昭六一教）と梅基様（昭六二児）、そして、何よりもあらゆる面で支えていただいた副支部長 成瀬様（昭五八食）に深く感謝申し上げます。次年度は支部長を平野様（昭五七家経）、副支部長を伊藤様（昭五七児）がお引き受け下さいました。

皆さまの変わらぬご尽力とご協力のおかげで二年間の支部長を務めることができました。ありがとうございました。



120周年祝賀会  
中島千波ステンドグラス前で



令和6年度 講演会  
令和6年10月13日（日）@栃木県総合文化センター



地域の方々と共に



# 『源氏物語』

## の遺響——和歌をめぐって——

立正大学文学部教授 渡邊 裕美子

### 一、「源氏見ざる歌よみは遺恨のことなり」

『源氏物語』が誕生後、どんなふうに使われて、何を生み出していったのか。こうした享受と創作の問題は、和歌を中心に論じられてきました。

中世初期の歌人藤原俊成が、「源氏見ざる歌よみは遺恨のことなり」（『源氏物語』）を読まない歌人がいるとは、なんて残念なことだ」と言ったことはよく知られています。これは十二世紀末の『六百番歌合』<sup>うたあわせ</sup>で、俊成が歌の勝負の判定の際に発したものです。その歌合で藤原良経が、

見し秋を何に残さむ草の原ひとへにかはる野辺の気色に  
という歌を、「枯野」という題で詠みました。秋には美しく見えた草の原が、冬になって枯野の一角に染まってしまったことを惜しむ歌です。この歌の評価を議論する場で、「草の原という言葉は聞きにくく」と発言した者がいました。その発言に俊成は敏感に反応して、「紫式部、歌よみの程よりも物書く筆は殊勝なり、その上、花宴の巻はことに艶なるものなり」



と言ひ、さらに「源氏見ざる歌よみは…」と続けた。この「草の原」ということばは、『源氏物語』の花宴巻に出てくるのです。それを知らないなんて、とかなり激しく非難しています。

『源氏物語』の誕生から約二百年後、中世歌壇を牽引した俊成のような歌人から、『源氏物語』は歌人の必読書と考えられるまでになっていました。続く時代、俊成の息子の定家が歌壇の中心となりましたが、その定家も『源氏物語』を尊重しました。

### 二、「源氏物語」と哀傷歌<sup>あいしょうか</sup>

『源氏物語』には多くの死が描かれています。まず、桐壺巻で光源氏の母の桐壺更衣が亡くなってしまい、それから、夕顔、葵の上、藤壺、紫の上などなど、主要な登場人物が亡くなっていき、その死を巡る周囲の哀しみが丁寧に描かれます。このような物語は他にはありません。そのため『源氏物語』誕生の時代から、現実に身近な人の死に遭遇すると、物語を踏まえて、その哀しみを表現することがありました。実は、『六百番歌合』の半年ほど前に俊成は、最愛の妻、美福門院加賀（藤原親忠女）<sup>ちかたのむすめ</sup>を亡くしていました。その死を悼む歌（哀傷歌）に、次のような歌があります。

思ひかね草の原とてわけ来ても心を碎く苔の下かな  
草の原わくる涙は砕くれど苔の下には答へざりけり

ここで「草の原」は墓所を表しています。妻がない寂しさに耐えかねて墓所を訪ねてきたが悲しみは深まるばかり、苔の下に眠る妻を思つて涙を流すけれども、亡き妻は答えてくれない、と深い孤独と哀しみを詠んでいます。

先の良経の歌では「草の原」が墓所を意味するとは強く打ち出されていませんが、もとなつた『源氏物語』では墓所の意味で用いられています。俊成

はそれを受けて妻を喪った哀しみを「草の原」を用いながら歌っているのです。

『六百番歌合』の際、「草の原」は「聞きにくい」と言った者を激烈な調子で非難したのは、このような個人的な事情も絡んでいたかもしれません。

秋を迎えて俊成の邸を訪れた定家は、母を喪った哀しみを次のような歌にしています。

たまゆらの露も涙もとどまらず亡き人恋ふる宿の秋風

玉のような露も涙もほんのしばらくの間もとどまることなく、とめどなく流れ落ち、亡くなった母を思う宿で秋風に吹かれている、という内容です。

この時、定家は、『源氏物語』で紫の上が亡くなった後、父光源氏のもとを訪れる夕霧と同化している、と久保田淳氏は指摘しています。

人生のなかで遭遇する最も痛切な悲しみとは、愛する人を喪うことでしょう。そのようなときに『源氏物語』は引き寄せられるのです。それは、『源氏物語』が人生の真実を描いているからだと言えます。『源氏物語』を引き寄せて哀傷歌を詠むことにより、自身の惑乱する気持ちを整理したり、他の人から深く共感してもらったりすることもできます。愛する人を喪った哀しみというものは、とても個人的で理解されにくく、孤独感に陥りがちです。そのようなときに、『源氏物語』が〈共感の基盤〉になったのです。

『源氏物語』を踏まえた哀傷歌は、先に述べたように早くから詠まれていました。『源氏物語』をとおして深い哀しみが表現されることで共感が生まれる――それは、身近な人々の間だけの話ではなく、遠い過去の人々との間でも可能になりました。

### 三、新古今時代の源氏取り

哀傷歌だけではなく、新古今時代には、さまざまな源氏取りの歌が詠まれました。たとえば、『百人一首』に入って、よく知られた式子内親王の歌、

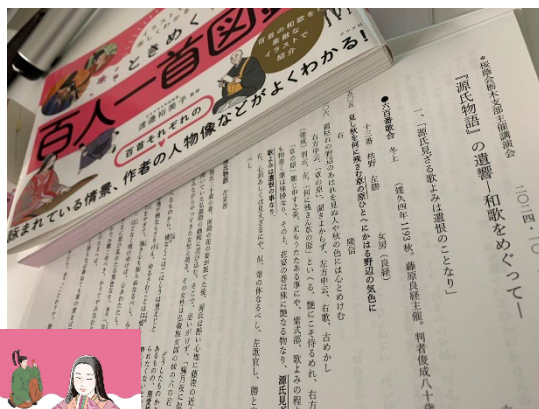
たまの緒よ絶えなば絶えね長らへば忍ぶることの弱りもぞする

もその一首です。自身の秘めた恋心を、耐えきれずに露見させてしまうくらいなら、この命よ、絶えてしまえ、と「たまの緒」(命)に呼びかける歌です。

この歌は、賀茂斎院として世間から隔絶された生活を送らなければならなかった、生身の式子内親王という一人の女性の感懐として、長らく読まれてきました。しかし、後藤祥子氏は、男性主体で詠まれていることが一般的な「忍恋」の題詠であることや、恋ゆえに命が絶えると詠む発想や用語が男性恋歌のものであることなどから、この歌は「男歌」だと指摘したのです。さらに、露見する前に死を望むほど、禁忌の激しい恋は、『源氏物語』の柏木の恋と重なるというのです。

つまり、この歌は、新古今時代に生まれた新しい源氏取りの恋歌だったのです。たった一首の例ですが、それでも新古今時代に、これまでには見られないような新しい源氏取りの歌がたくさん生まれたことは想像できるでしょう。

こうしたことは和歌に限った話ではありません。『源氏物語』は、歴史上に姿を見せると、尽きることはない泉となつて流れ出し、時代・ジャンル・メディア・階層・ジャンル・空間を超えて広がり、浸透し、豊饒な実りをもたらしたのです。



詠まれている情景、作者の人物像などがよくわかる!

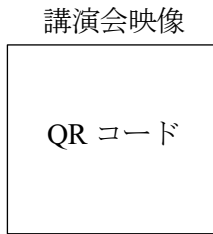
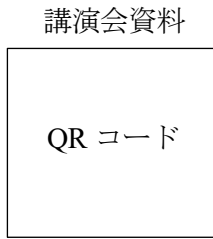
(渡邊 裕美子氏ご著書・ナツメ社)



## 講演会資料および映像の限定公開について

講演者である渡邊様のご配慮により、当日の配布資料および講演内容映像を会員限定で共有いたします。次のURLもしくはQRコードからご利用ください。

なお、ご利用にあたっては桜蔭会栃木支部会員限定で、SNS等へのURLおよびQRコードの掲載は厳禁です。栃木支部会員数に比べて著しくアクセス数が増えた場合は即時、非公開とします。何卒よろしくお願いいたします。



講演会資料

[https://.....](https://...)

講演会映像

[https://.....](https://...)

事務局 大森(平六食)

## 講演会ほかご報告

当番幹事 三村(平一音)

縁もゆかりもない栃木に移住して、毎日仕事だけをし、人とのつながりもいまま5年が過ぎようとしていたところ、桜蔭会栃木支部の先輩方にお会いすることができ、一気に温かなつながりが広がりました。総会には初めて出席させていただきましたが、何も構えることなく素敵な先輩方と交流させていただき、まさに感動の連続でした。私が生まれるより前にお茶大をご卒業された方々はじめ、皆様、全く年をとられておらず、それぞれに社会やコミュニケーションの中で活躍され輝いておられました。日々疲れている自分とは大違いでびっくり仰天いたしました。そして源氏・これがまた感動でした。私は、光る君にしる何にしる全く源氏物語には興味がなく、立正大学教授渡邊裕美子先生のお話についていける心配であったのですが、全く予想に反し、これほど面白く意外性に満ちたご講演はありませんでした。ご紹介くださった藤原俊成などの歌の中に表れるように、恋や哀悼など人生に添わせて源氏が詠まれ、新しい文学が次々に生み出されていくという、源氏物語の全く存じなかった面を知り、これもびっくり仰天でした。自分の日常は、感情に流されず感情を表さず、緊張を失った時が陥落時・・というような毎日であるのに対し、源氏によって広がった文学は、

こんなにも無防備に感情が流れる世界であり、とても新しい感動がありました。支部長様始め支部の皆様が毎年大切につなげてこられた支部の活動に、これからも参加させていただきたいと、心より思いました。ありがとうございました！



当番幹事 榎津(平二食)

高校時代、古典が苦手で敬遠しながら過ごしていた私ですが、渡邊先生の講演を拝聴するとたちまち中世和歌の世界に引き込まれ、詠み人の心情に想いを馳せることができました。源氏物語という作品が時代を越えて、日本国内のみならず世界中の人々から愛される理由がわかり、いきなり原文を手取る

のは難しいにしても、その表現の美しさや現代に通ずる人間の真理に触れてみたいと思いました。

講演会後は初めて総会に参加いたしました。皆様は温かく迎え入れていただき、楽しくお話することができました。卒業生の皆様が多方面で活躍されていることに感服し、プライベートでも様々な趣味や資格取得に挑戦されたり、社会貢献されたりしているお話を興味深く伺っているうちに、あつという間に時間が過ぎてしまいました。「年を重ねるのは楽しい」「出来る事がどんどん増えていく」というお話もありましたが、皆様からまだまだ色々なことにチャレンジできるという勇氣とパワーをいただきました。「日本人で良かった」「お茶大の卒業生で良かった」と改めて感じられる素晴らしい一日になりました。このような機会を与えてくださった渡邊裕美子先生、事務局の皆様方に心より感謝申し上げます。

### 当番幹事 村山（平五家経）

今回、初めて参加させて頂きました、平成5年家経卒の村山と申します。支部だよりは楽しく拝読しておりましたが、なかなか参加する勇氣が持てずにおりました。この度、渡辺支部長より直接お声かけ頂き、緊張しつつ、会場に向かいました。

講演会が始まると、古文に久しぶりに接した私にも分かりやすく、楽しいお話にすっかり引き込まれてしまいました。学生時代よりも、真剣に講義を聞

き、世界が広がったような、わくわくするような気分でした。

その後の総会では、先輩方の話を伺えて、楽しい時間を過ごせました。皆さん、明るく、好奇心旺盛でお元気で、話題が豊富で、こんな風に自分も時間を重ねていきたいと強く思いました。私自身、以前より記憶力も体力も落ちたことを実感し、人生百年時代というけれど、この先を考えるとふさぎ込みだり落ち込んだり、ということが多くなっていたのですが、元氣と勇氣をいただけたような気がします。本当に参加してよかったです。そして、これからもよろしく願います。

### 総会・昼食・懇談会報告

#### 副支部長 成瀬（昭五八食）

講演会終了後、会場を「明日香宇都宮店」に移し、参加者二十一名による総会が行われました。令和五年度の会計報告が承認された後、次年度新支部長の平野様、新副支部長の伊藤様のご紹介があり、参加者全員拍手をもってお迎えました。

この後、講師の渡邊裕美子先生を囲んでの昼食会



では、秋を感じる美しい料理が運ばれ、講演会の余韻もあつてか源氏物語の世界観と一緒に味わった気分になりました。近況報告会では、八十代の先輩方から、語学に登山、社会活動などに参加されている様子を伺って勇氣づけられ、現役社会人の方々からは様々なエピソードをお聞きし、あつという間の楽しい三時間でした。懇談の中で、親戚知己のいない本県に転居した折に栃木支部会の存在が心強かった、と言う声も聞かれ、支部会は灯台の様な存在なのかもと感じます。現在、講演会が支部公益事業として地域の方々に開かれている意味も大きく、同窓会支部会の存在意義を改めて認識する一日となりました。